

関東の華・前橋城



前橋市観光協会

(平成元年10月撮影
(黄線内が再築前橋城の範囲)

前橋城の変遷

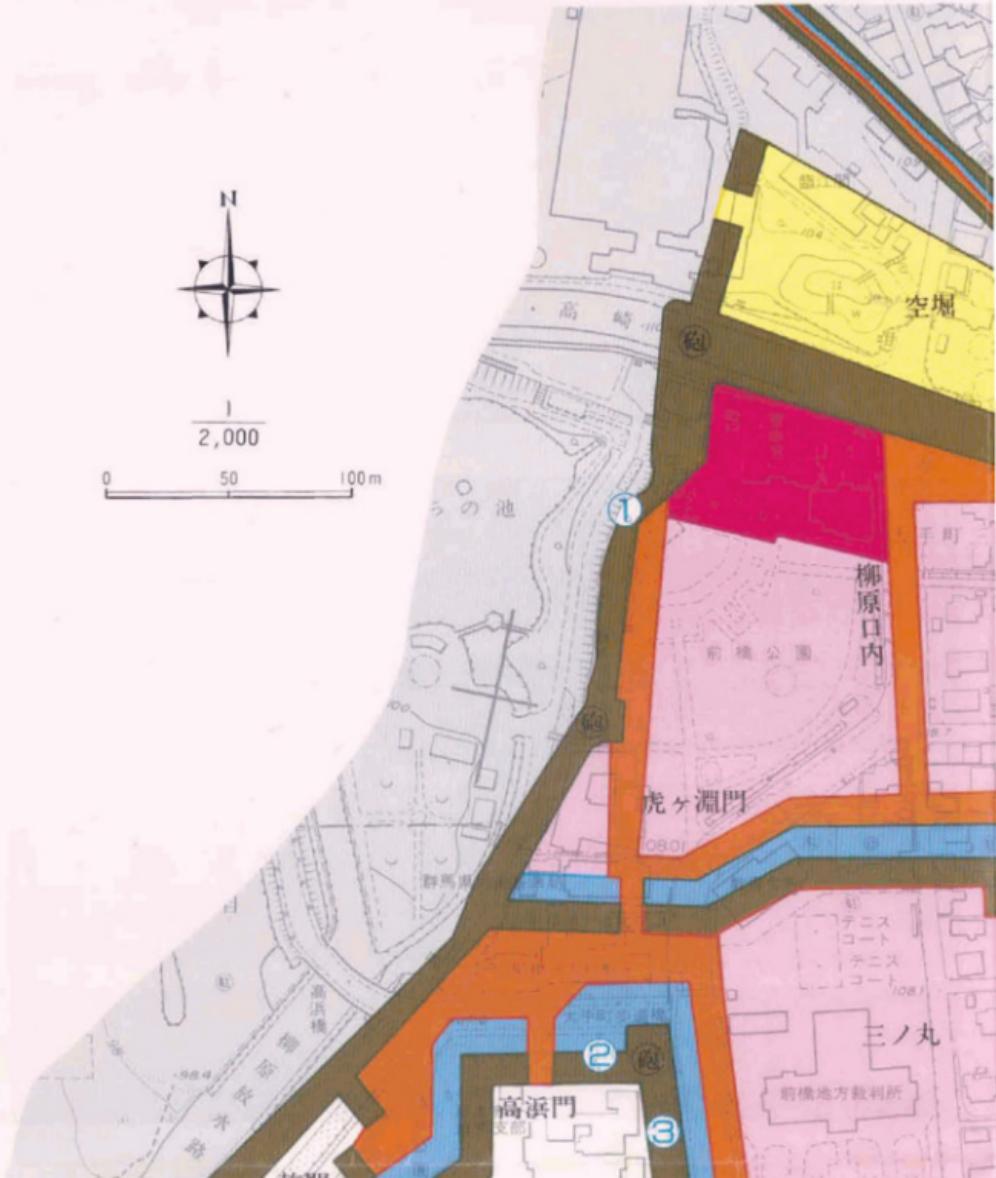
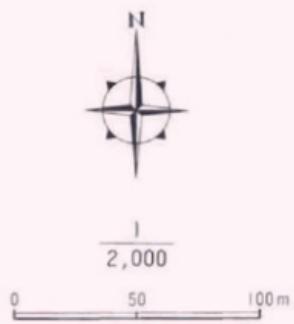
前橋には、かつて徳川家康より「関東の華」と言わされたという名城前橋（古くは懸橋）城があった。その築城は古く、15世紀末、長野氏によるとされている。

群雄割拠の戦国期を迎えると、越後の長尾景虎（上杉謙信）の関東進出の拠点となり、城代北条高広により守られた。しかし、謙信の死後、天正7年（1579）北条氏は武田勝頼に従った。また、武田氏が天正10年（1582）滅亡すると、織田信長家臣の滝川一益が入ったが、信長急死により本国へ帰り、城は小田原北条氏の手中に帰した。

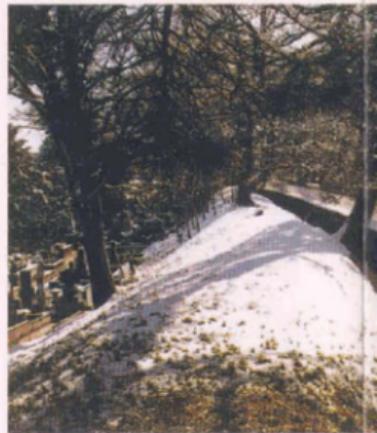
天正18年（1590）徳川家康が関東に入ると、辰橋には平岩親吉を封じた。また、関ヶ原の戦の後、慶長6年（1601）には平岩氏に代わり、家康の重臣、酒井忠重が入城した。酒井氏はその後9代約150年にわたり城主を務め、城郭や城下町を整備した。しかし、17世紀後半から利根川の洪水による城の崩壊が進んだことも原因して、寛延2年（1749）には、城主酒井忠恭は姫路に転封となり、代わって姫路城主松平朝矩が入城した。

その後も城の川欠けは続き、修復工事も行われたが、18年後の明和4年（1767）には、城主松平朝矩は前橋城を放棄し、川越へ移らざるをえなかつた。城主が不在になると、前橋城は壊されることになり、約100年間、陣屋が置かれた。その間、町は寂れるいっぽうだったが、幕末になると、安政6年（1859）の横浜開港とともにう生糸貿易により、前橋は活況を呈した。そして、慶応3年（1867）には、町人等の協力を得て、前橋城を再築して城主松平直克を迎えることができた。だが時代は大きく転換して、翌年には明治維新となり、明治4年（1871）に廃藩置県が行われ、その後、城の本丸は県庁として使われるようになった。

再築前橋城



復元図

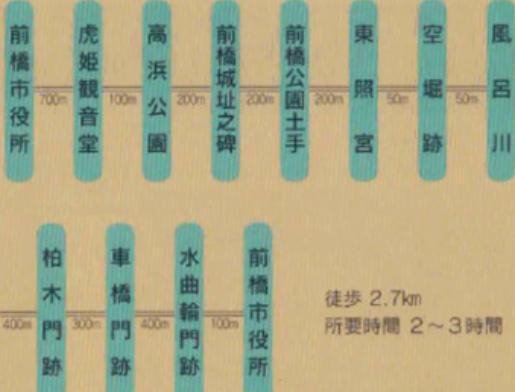


④風呂川 (広瀬)

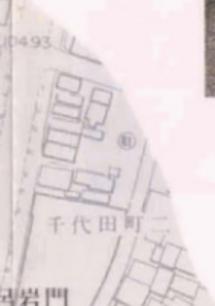


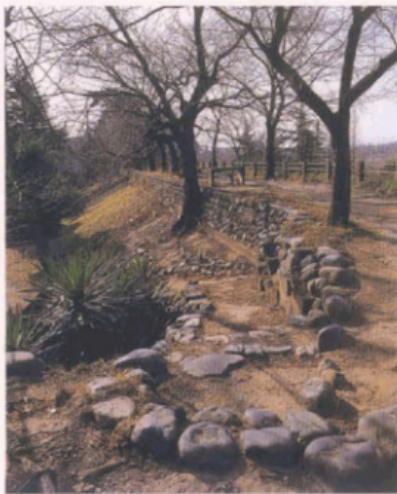
瀬川より城内の生活用水として引き入れた川。現在も同じ所を流れる)

前橋城跡探索モデルコース



⑤前橋城車橋門跡（前橋城関連の城門として唯一残る門跡）



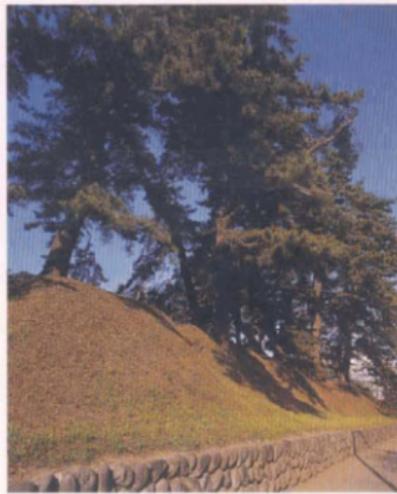


①前橋公園土手（再築前橋城土塁跡）



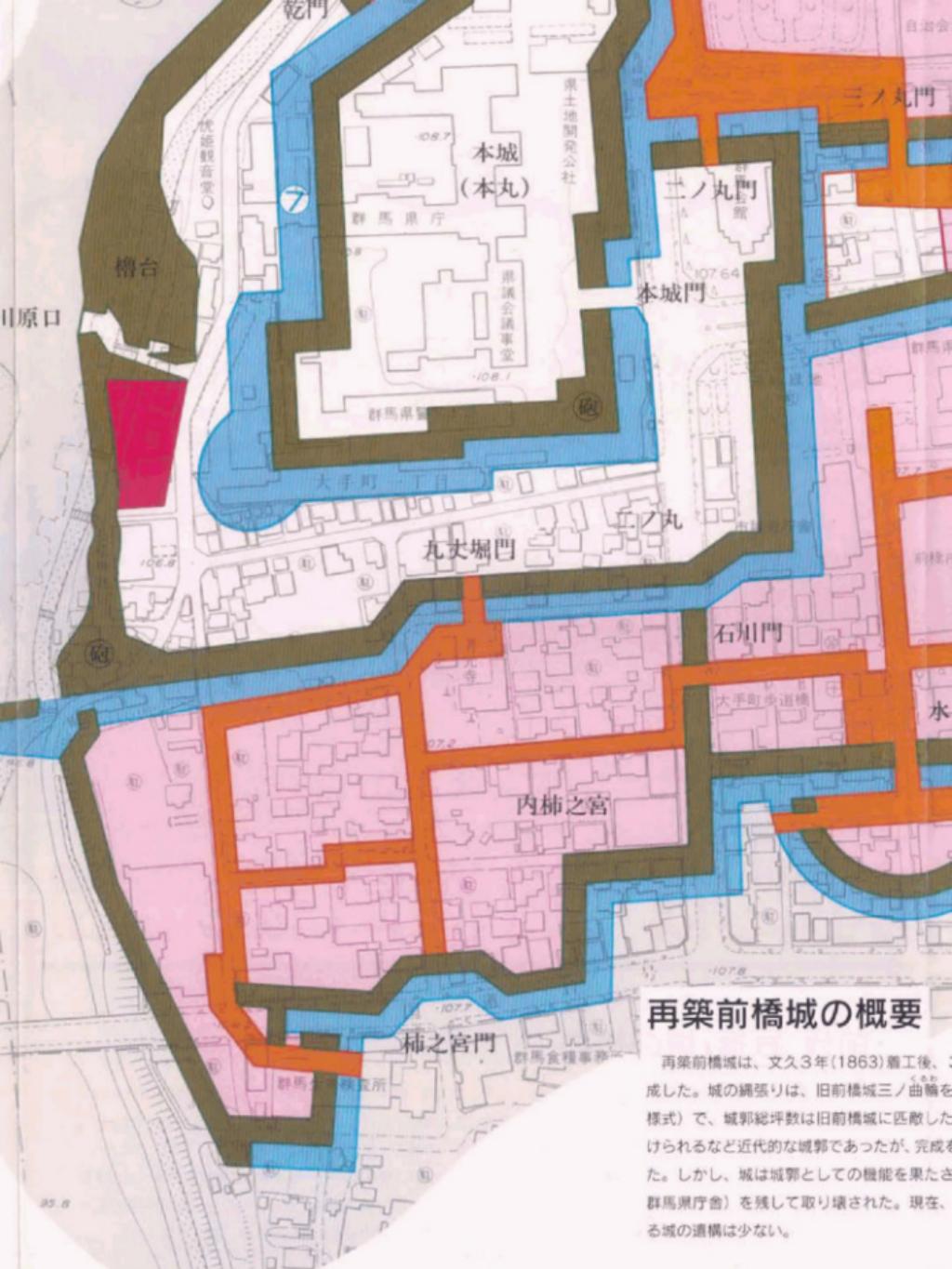
②前橋城址之碑（碑文には城主松平直克の城再築の功を讃んでこの碑を建てるとある。）

撰文 重野安輝
書 日下部東作



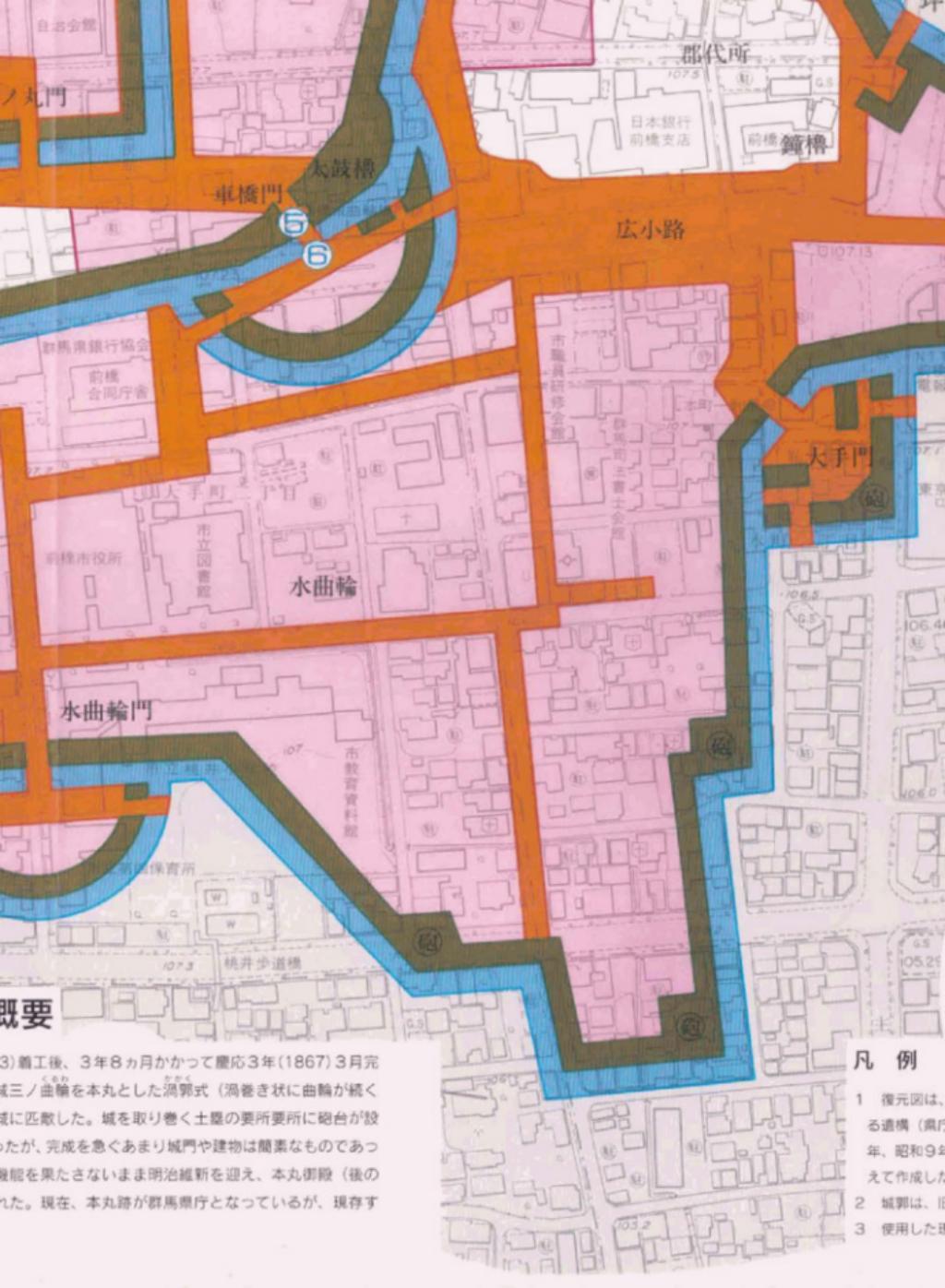
③群馬県庁土塁（再築前橋城土塁跡）

下川原口



再築前橋城の概要

再築前橋城は、文久3年(1863)着工後、完成した。城の縄張りは、旧前橋城三ノ曲輪を模式で、城郭総坪数は旧前橋城に匹敵しきられるなど近代的な城郭であったが、完成した。しかし、城は城郭としての機能を果たさず(群馬県庁舎)を残して取り壊された。現在、城の遺構は少ない。



概要

(3) 着工後、3年8ヶ月かかって慶應3年(1867)3月完成。三ノ曲輪を本丸とした渦郭式(渦巻き状に曲輪が続く)に匹敵した。城を取り巻く土塁の要所に砲台が設けられたが、完成を急ぐあまり城門や建物は簡素なものであつた。機能を果たさないまま明治維新を迎へ、本丸御殿(後の群馬県庁)が建設された。現在、本丸跡が群馬県庁となっているが、現存す

凡例

- 復元図は、
る遺構(奥方
年、昭和9年
えて作成した
- 城郭は、
3 使用した



⑥車橋門地下石積（昭和63年に発掘調査され
現在保存されている）



⑦群馬県庁まわりの堀跡（本丸西側の堀 現存しない 昭和32年頃島田幸一氏撮影）

は、再築前橋城絵図（群馬県立文書館所蔵）をもとに、現存する県庁北側土塁、前橋公園土手、車橋門跡、空堀跡）及び明治21九年、昭和26年等の前橋市街地図を参考にし、現地調査を踏ました。
。旧町の北曲輪町、曲輪町、南曲輪町が、ほぼその範囲となる。
た現況図は、前橋市役所発行の昭和63年12月修正版である。

- 発行 前橋市観光協会
前橋市大手町2-12-1 ☎(027)224-1111内線03603
- 編集 前橋市教育委員会 文化財保護課
前橋市上泉町664-4 ☎(027)231-9862・9531
- 監修 佐藤 寅雄
- 助言 前橋市文化財調査委員
- 印刷 朝日印刷工業株式会社
前橋市元柳町67 ☎(027)251-1212

城絵図でみる 前橋城の変遷



前橋城天守閣（酒井氏時代）



旧群馬県庁車寄せ（再築前橋城本丸御殿玄関）



酒井重忠画像（江戸時代最初の城主）
(源英寺所蔵)

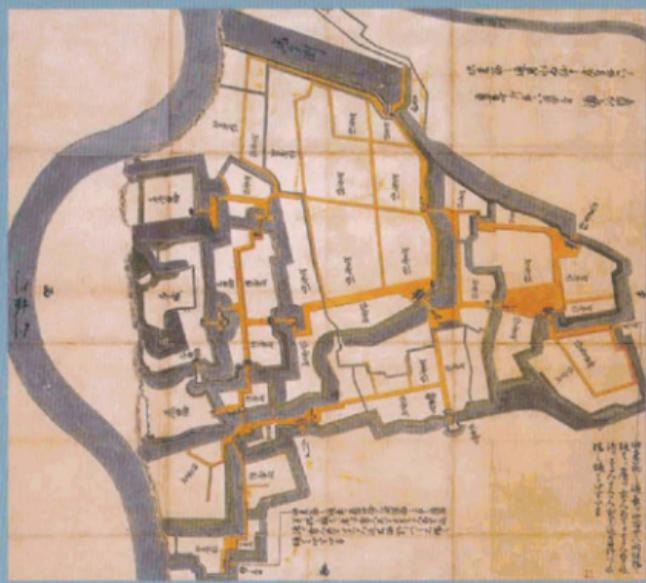


松平直克像（江戸時代最後の城主）

約300年前の前橋城絵図

絵図に「此朱筋之通用水為
塙申度奉存候以上 貞享四年
酒井河内守」とあることから、
酒井河内守忠掌のときに、城
内に用水堀を引こうと幕府に
願い出たときのものとわかる。
絵図には、用水堀の全長、広さ、
深さが、記されている。

(前橋市立図書館所蔵)



約230年前の前橋城絵図

利根川の洪水による城の崩
壊は防ぎようがなく、高浜曲
輪が崩れ、本丸までも浸食さ
れた。酒井忠恭に代わり姫路
より入城した松平朝矩も前橋
城を放棄せざるをえなくなつ
た。城の川欠けの様子がよく
わかる絵図。

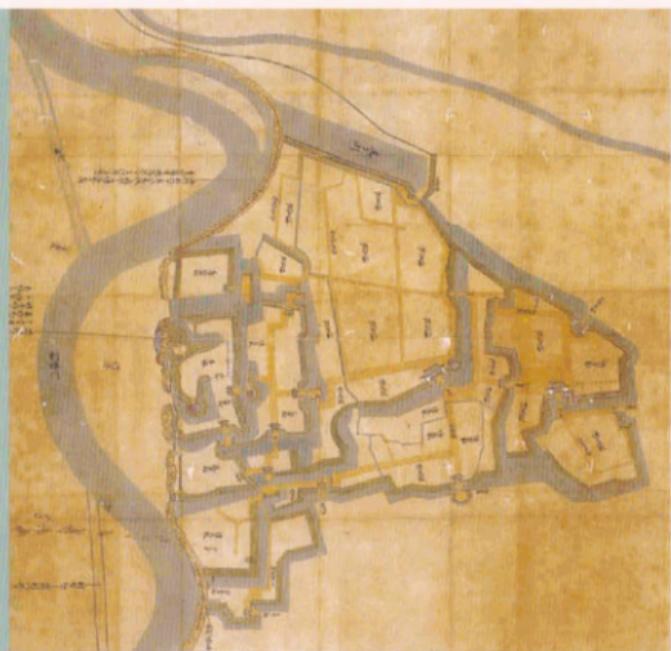
(寒河江まさ氏所蔵)



約 280 年前の 前橋城 絵図

天然の要害であった利根川が、洪水により城郭を崩壊するため、高浜向河原とその南に堤を開き、流路を変更しようとしたときの絵図。

(前橋市立図書館所蔵)



約 160 年前の 前橋陣屋 絵図

明和4年(1767)藩主松平朝矩が川越へ移城すると、前橋城は取り壊され、代わって陣屋が置かれた（現在の日本銀行前橋支店付近）。幕末に城が再築されるまでの約100年間、前橋は陣屋支配の状態が続いた。

(田代よし子氏所蔵)



約 **270** 年前の
前橋城絵図

流路変更工事により利根川の流れは変わったが、意に反して本丸北に位置する高浜曲輪を直撃するようになり、城郭の崩壊は防止できなかつた。

(前橋市立図書館所蔵)



約 **120** 年前の
再築前橋城絵図

幕末になると、生糸貿易で財をなした前橋町民や領地内の村人の協力を得て、前橋城三ノ曲輪を本丸とする城を再築した。現在の群馬県庁は、その本丸跡に建っている。表の再築前橋城復元図は、この絵図をもとに作成した。

(群馬県立文書館所蔵)





凡 例

- 復元図は、城内を貞享4年(1687)の前橋城絵図(前橋市立図書館所蔵)、城外を文政4年(1821)の前橋町絵図(勝山敏子所有・群馬県立文書館寄託)をもとに作成した。(ただし、武家屋敷町は入っていない。)
- 使用した現況図は、前橋市役所発行の昭和63年12月修正版である。



前橋城・前橋町復元図

まやはし 前橋(厩橋)城の概要

前橋(厩橋)城は、戦国群雄の争点となった城を原型として増補改修を重ね、小田原北条氏、平岩氏時代を経て、酒井忠世・忠清の代に総坪数15万余坪の城郭として完成した。城は、江戸を守る北関東のおさえとして、また利根川を利用した要塞堅固の列郭式(継横方向に曲輪を並べた様式)の構張りをもつ城として、宇都宮、川越、忍と並んで関東の四名城の一つに数えられたと言われる。その築城は、15世紀末、箕輪長野氏一族の長野左衛門尉方業(園山宗賢)によるとされている。しかし、17世紀後半になると利根川の洪水により城の崩壊が進み、18世紀には酒井氏の転封、松平氏の川越への移城を迎え、明和6年(1769)に三重櫓の天守閣、大手門などが取り壊され、廃城となつた。

城下町前橋の概要

江戸幕府の老中・大老を務めた酒井氏15万石の城下町として発展した前橋町は、商人頭木嶋氏の住む連雀町を中心に、江戸道・沼田街道に沿って、町が形成された。当時の町名をみると、連雀町、銀治町、紺屋町、本町など城下町に共通する町名があったのがわかる。また、町の西に位置する城の北、東、南には、城の出丸としての意図を含んで、寺院が配置された。再築された前橋城が廢城となつた明治時代になつても、城下の各町は江戸時代と大きな変動がなく存続したが、昭和40年代に行われた町名変更により、現在の町名・区域割りに変わつた。



関東の華・前橋城

再築前橋城復元図



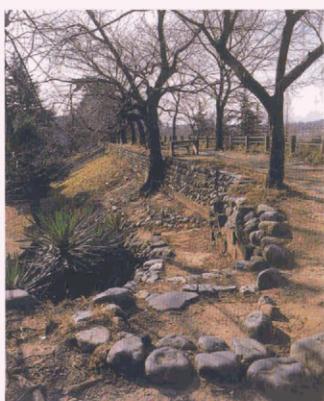
前橋城の変遷

前橋には、かつて徳川家康より「関東の華」と言わされたという名城前橋（古くは厩橋）城があった。その城は古く、15世紀末、長野氏によるとされている。

群雄割拠の戦国期を迎えると、越後の尾張虎（上杉謙信）の関東進出の拠点となり、城代北条高広により守られた。しかし、謙信の死後、天正7年（1579）北条氏は武田勝賴に従った。また、武田氏が天正10年（1582）滅ぼされると、織田信長家臣の池川一益が入ったが、信長急死により本国へ帰り、城は小田原北条氏の手中に帰った。

天正18年（1590）徳川家康が関東に入ると、厩橋には平岩親吉を封した。また、関ヶ原の戦いの後、慶長6年（1601）には平岩氏に代わり、家康の重臣、酒井重忠が入城した。酒井氏はその後約150年にわたり城主を務め、城郭や城下町を整備した。しかし、17世紀後半から利根川の洪水による城の崩壊が進んだことも原因して、寛延2年（1749）には、城主酒井忠宗は姫路に転封となり、代わって姫路城主松平勘矩が入城した。

その後も城の川欠けは継ぎ、修復工事も行われたが、18年後の明和4年（1767）には、城主松平勘矩は前橋城を放棄し、川越へ移らざるをえなかつた。城主が不在になると、前橋城は壊されることになり、約100年間、陣屋が置かれた。その間、町は寂れるいっぽうだったが、幕末になると、安政6年（1859）の横浜開港とともに生糸貿易により、前橋は活況を呈した。そして、慶応3年（1867）には、町人等の協力を得て、前橋城を再築して城主松平直置を迎えることができた。だが時代は大きく転換して、翌年には明治維新となり、明治4年（1871）に廃藩置県が行われ、その後、城の本丸は県庁として使われるようになった。

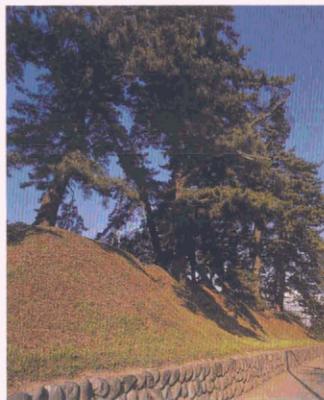


①前橋公園土手（再築前橋城土塁跡）

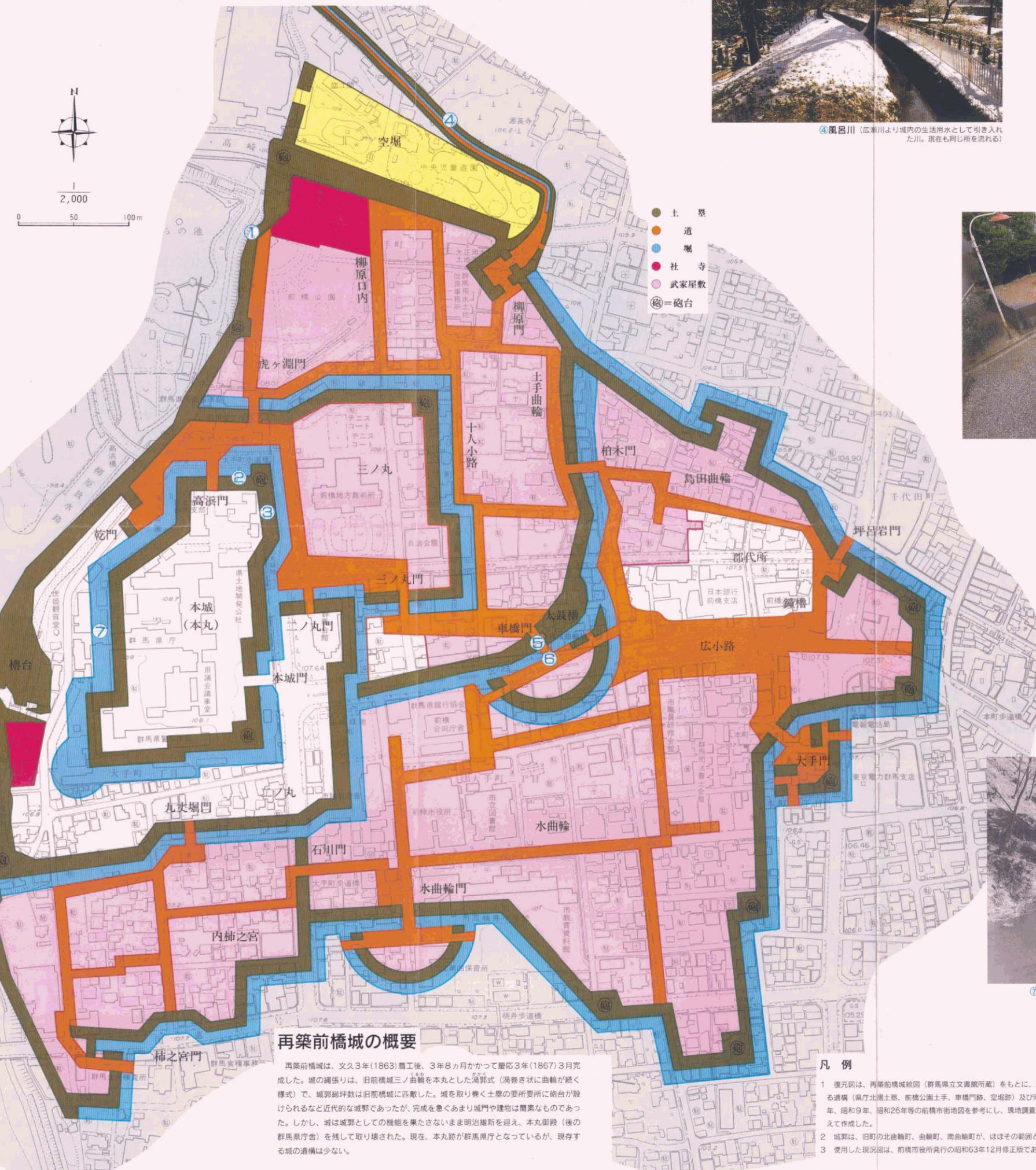


②前橋城址之碑（碑文には城主松平直置の功を讃んでこの碑を建てるとある。）

撰文 重野安達
書 日下部東作



③群馬県庁土塁（再築前橋城土塁跡）

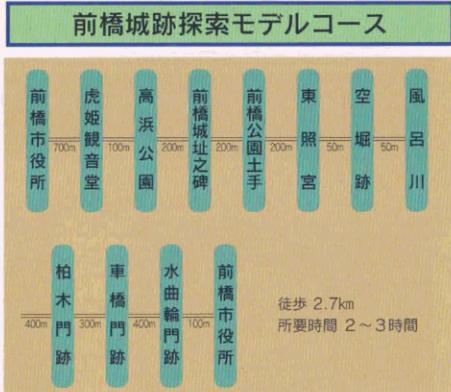


再築前橋城の概要

再築前橋城は、文久3年（1863）着工後、3年8ヶ月をかけて慶応3年（1867）3月完成した。城の構造強化は、旧前橋城三曲輪を本丸とした複郭式（渦巻き状に曲輪が続く様式）で、城郭総坪数は旧前橋城に匹敵した。城を取り巻く土塁の要所要所に砲台が設けられるなど近代的な城郭であったが、完成を早くあまり城門や建物は簡素なものであつた。しかし、城は城郭としての機能を果たさないまま明治維新を迎えた。本丸御殿（後の群馬県庁舎）を残して取り壊された。現在、本丸跡が群馬県庁となっているが、現存する城の遺構は少ない。



④風呂川（広瀬川より城内に生活用水として引き入れた川。現在も同じ所を流れている。）



⑤前橋城車橋門跡（前橋城関連の城門として唯一残る門跡）



⑥車橋門地下石積（昭和63年に発掘調査され、現在保存されている）



⑦群馬県庁まわりの堀跡（本丸西側の堀、現存しない。昭和32年頃島田幸一氏撮影）

- 復元図は、再築前橋城絵図（群馬県立文書館所蔵）をもとに、現存する遺構（県庁北側土塁、前橋公園土手、車橋門跡、空堀跡）及び明治21年、昭和9年、昭和26年等の前橋市街地図を参考にし、現地調査を踏まえて作成した。
- 城郭は、旧町の北曲輪町、曲輪町、南曲輪町が、ほぼその範囲となる。
- 使用した現況図は、前橋市役所発行の昭和63年12月修正版である。

- 発行 前橋市観光協会
前橋市大字中之郷12-1 (027)224-1111内線0303
○編集 前橋市教育委員会 文化財保護課
前橋市上町684-4 (027)231-9852-9531
○監修 佐藤 寅雄
○助言 前橋市文化財調査委員会
朝日印刷工業株式会社
前橋市元松町67 (027)251-1212

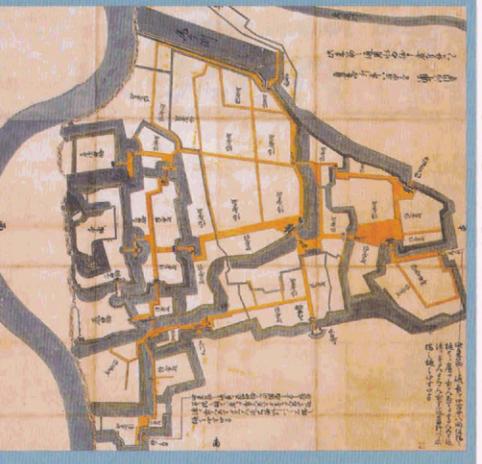
城絵図でみる 前橋城の変遷



300年前の
前橋城絵図

絵図に「此朱箭之通用水為
堀申度奉存候以上 貞享四年
酒井河内守」とあることから、
酒井河内守忠宗のときに、城
内に用水堀を引こうと幕府に
願い出たときのものとわかる。
絵図には、用水堀の全長、広さ、
深さが、記されている。

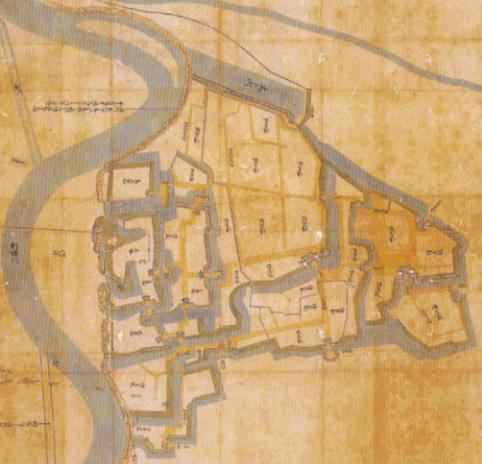
(前橋市立図書館所蔵)



約280年前の
前橋城絵図

天然の要害であった利根川
が、洪水により城郭を崩壊す
るため、高浜向河原とその南
に堀を開き、流路を変更しよ
うとしたときの絵図。

(前橋市立図書館所蔵)



約270年前の
前橋城絵図

流路変更工事により利根川
の流れは変わったが、意に反
して本丸北に位置する高浜曲
輪を直撃するようになり、城
郭の崩壊は防止できなかった。

(前橋市立図書館所蔵)



酒井重忠画像 (江戸時代最初の城主)



松平直克像 (江戸時代最後の城主)

約230年前の
前橋城絵図

利根川の洪水による城の前
堀は防ぎようがなく、高浜曲
輪が崩れ、本丸までも浸食さ
れた。酒井忠宗に代わり堀路
より入城した松平朝矩も前橋
城を放棄せざるを得なくなつ
た。城の川欠けの様子がよく
わかる絵図。

(寒河江まさき氏所蔵)



約160年前の
前橋陣屋絵図

明和4年(1767)藩主松平
朝矩が川越へ移城すると、前
橋城は取り壊され、代わって
陣屋が置かれた(現在の日本
銀行前橋支店付近)。幕末に城
が再築されるまでの約100年
間、前橋は陣屋支配の状態が
続いた。

(田代よし子氏所蔵)



約120年前の
再築前橋城復元図

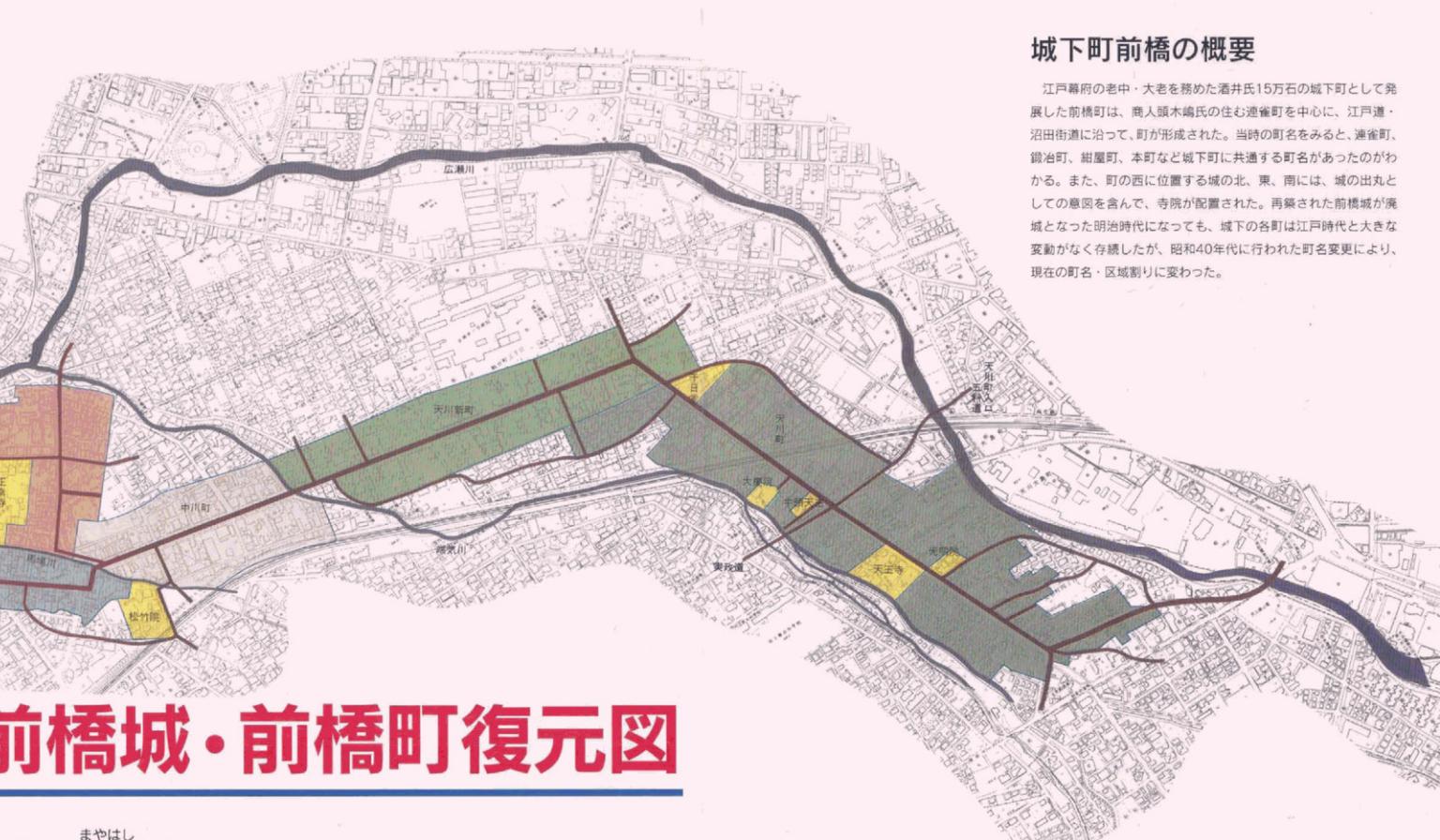
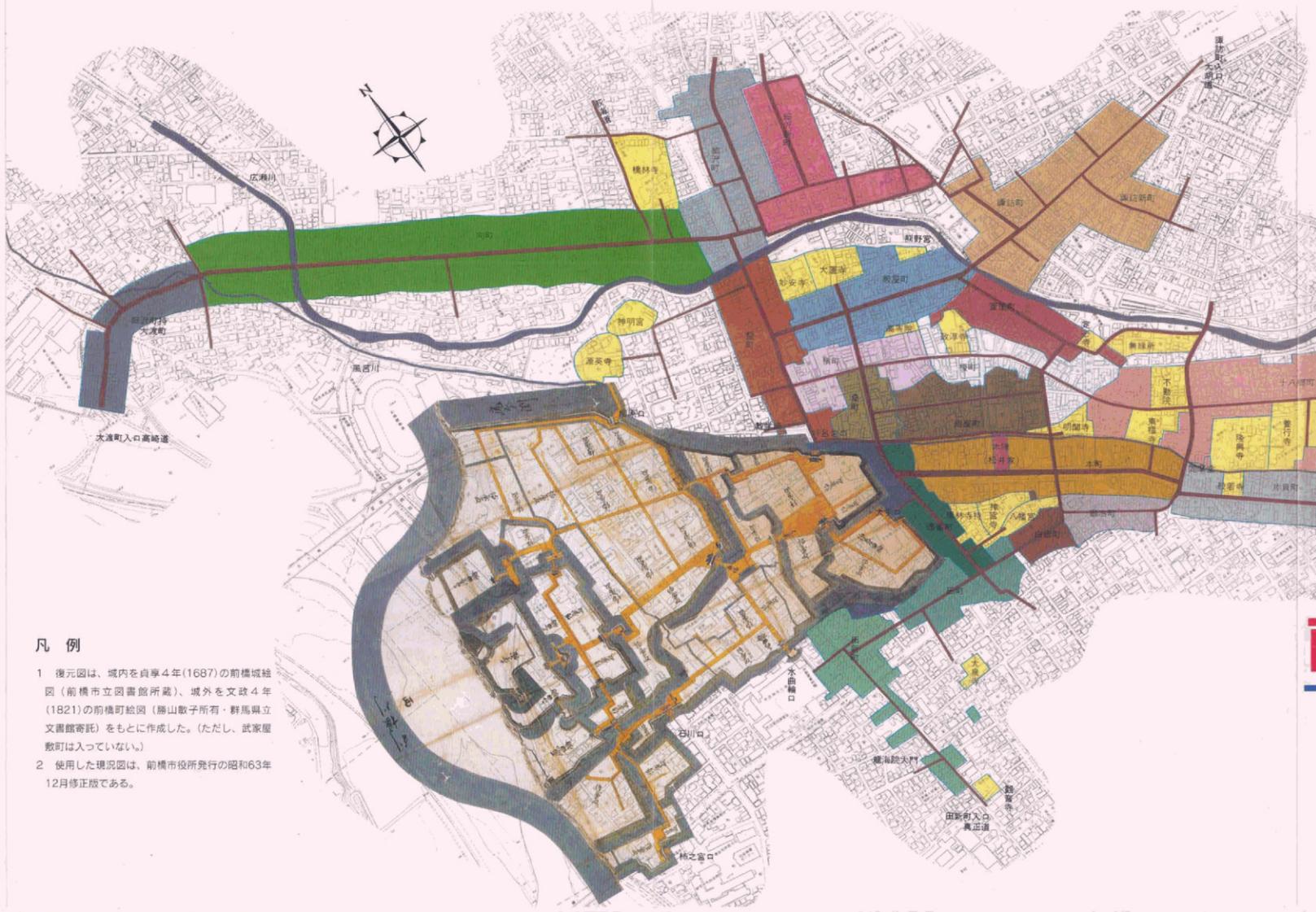
幕末になると、生糸貿易で
財をなした前橋町民や領地内
の村人の協力を得て、前橋城
三ノ曲輪を本丸とする城を再
築した。現在の群馬県庁は、
その本丸跡に建っている。表
の再築前橋城復元図は、この
絵図をもとに作成した。

(群馬県立文書館所蔵)



城下町前橋の概要

江戸幕府の老中・大老を務めた酒井氏15万石の城下町として発展した前橋町は、商人木嶋氏の住む連雀町を中心に、江戸道・沼田街道に沿って、町が形成された。当時の町名をみると、連雀町、銀治町、紺屋町、本町など城下町に共通する町名があつたのがわかる。また、町の西に位置する城の北、東、南には、城の出丸としての意図を含んで、寺院が配置された。再築された前橋城が廣城となつた明治時代になつても、城下の各町は江戸時代と大きな変動がなく存続したが、昭和40年代に行われた町名変更により、現在の町名・区域割りに変わった。



前橋城・前橋町復元図

まやはし 前橋(鶴橋)城の概要

前橋(鶴橋)城は、戦国群雄の争点となった城を原型として増補改修を重ね、小田原北条氏、平岩氏時代を経て、酒井忠世・忠満の代に総坪数15万余坪の城郭として完成した。城は、江戸を守る北関東の拠点として、また利根川を利用した要塞堅固の列式式(縦横方向に曲輪を並べた様式)の縄張りをもつ城として、宇都宮、川越、忍と並んで関東の四名城の一つに数えられたと言われる。その築城は、15世紀末、算輪長野氏一族の長野左衛門尉方義(園山宗賢)によるとされている。しかし、17世紀後半になると利根川の洪水により城の前堀が進み、18世紀には酒井氏の転封、松平氏の川越への移城を迎へ、明和6年(1769)に三重櫓の天守閣、大手門などが取り壊され、廢城となつた。

1
6,000

0 100 250 500 m

凡例

1 復元図は、城内を貞享4年(1687)の前橋城絵図(前橋市立図書館所蔵)、城外を文政4年(1821)の前橋町絵図(藤山敬子所有・群馬県立文書館寄託)をもとに作成した。(ただし、武家屋敷町は入っていない)。

2 使用した現況図は、前橋市役所発行の昭和63年12月修正版である。